

昭和初期に開発された堺市大美野住宅地における地域景観の保全に関する研究

株式会社現代ランドスケープ 田川 圭佑
大阪府立大学大学院生命環境科学研究科 加我 宏之
大阪府立大学大学院生命環境科学研究科 下村 泰彦
大阪府立大学大学院生命環境科学研究科 増田 昇

1. はじめに

堺市の郊外に位置する大美野住宅地は、昭和初期に欧州の田園都市をモデルとして開発され、関西の郊外住宅地の先駆けとなった住宅地であり、ロータリーを中心としたドイツ式の放射環状道路を配し、接道部にカイズカイクキの生垣を設置する等開発当初から計画的に地域の個性が醸成されてきた。

近年、都市近郊の住宅地において、建物の老朽化による建て替えや財産相続による敷地分割等といった住宅更新が数多く発生しており、それに伴い、住宅地の風格や個性を形成していた接道部の緑や生垣が減少し、住宅地の画一化や地域らしさの喪失を招いている。大美野住宅地も例外ではなくカイズカイクキの生垣をはじめとした接道部の緑の減少や、その他の生垣を有する敷地が発生し、カイズカイクキの生垣が連担した通り景観が崩れてきている。

住宅地景観を扱った既往研究をみても、村浦¹⁾らは地区の歴史性の破壊が居住者の日常風景の評価に不快感をもたらすことを明らかにした。橋詰²⁾らは、長い年月をかけて育まれてきた樹木が住宅地の景観を特徴づけていることを明らかにし、その保全の重要性を述べている。住宅更新とそれに伴う緑の継承に言及した研究をみても、山田³⁾らは戸建住宅地における住宅更新に伴う緑の変化実態とその影響要因を捉え今後の緑の継承に向けた方向性を述べている。また、田川⁴⁾らは、大美野住宅地を対象として、近年の住宅更新とそれに伴う生垣の減少によって地域固有の景観が崩れてきていることを明らかにし、その保全と新たな蓄積に向けた課題と方向性を探った。

以上を踏まえ、本研究では文献とヒアリング調査から大美野らしい景観がどのように計画・実現され、現在まで継承されてきたかをハード、ソフトの両視点から明らかにするとともに、写真投影法を通じて、生活者が捉えた大美野らしい景観を明らかにすることで、今後残していくべき景観と、その保全方策を考察した。

2. 調査及び解析方法

(1) 調査対象地区の概要

調査対象地区は堺市東部に位置し、昭和6年に関西土地株式会社によって欧州の田園都市をモデルとして開発された堺市大美野住宅地とした。関西土地株式会社は大美野田園都市を開発するにあたって、大正16年～17年に自社の建築士下村喜三郎を欧州に派遣させた^{資料1)}。昭和6年に帰国した下村は大美野田園都市第一期開発の設計に携わり、

大美野田園都市に住むためのマニュアルを作成するなど大美野田園都市開発の基盤となる部分を作ったものの、昭和8年頃に関西土地株式会社を退社し、第二期開発には関わらなかった^{資料1)}。本研究の対象区域は、関西土地株式会社の大美野田園都市第二期売り出し地割り図^{資料1)}に記載された16万坪と現在の大美野地区の町界を参考として、図1に示す区域とした。

また、大美野第一期販売後の昭和10年には住民組織である大美野会が組織された。第二次世界大戦時に大美野会は戦争に関与したとして昭和20年に一度解散させられるが、昭和24年に再組織され、現在まで活動が続けられている。

(2) 大美野の景観資源の抽出に関する方法

調査では表1に示す文献調査、図上調査、現地調査、大美野会前役員に対するヒアリング調査を通じて大美野の形態的特徴と社会的特性に関する事項を抽出した。大美野の形態的特徴については抽出した内容を「土地利用」や「施設配置」、「地形及び景勝」からなる『全体計画』、「道路構成」や「街路パターン」からなる『街路形態』、「区画数と敷地規模、建蔽率」や「住宅様式」、「敷地際形態」からなる『敷地形態』に分類した。さらに、下村が設計に携わった「第一期開発地区」(昭和6～10年)、下村が退社後に開発された「第二期開発地区」(昭和7～16年)、第一期と第二期開発に区別されない「大美野開発全体」(昭和6～16年)、以上に加えて「現在の状況」に整理した。なお、現地調査は平成23年11月中旬から12月下旬にかけて行い、「地形及び景勝」、「道路構成」を調査した。また、「敷地際形態」について既往研究のデータ⁴⁾に補正調査を行い、カイズカイクキの生垣の分布を把握した。

社会的特性については『大美野会の設立と動向』、開発者である関西土地株式会社による『協定・ルール・制度』に整理した。『大美野会の設立と動向』は「目的」、「事業」の2

表1 調査対象文献一覧

No.	資料名	出版社	出版年
1	近代日本の郊外住宅地	鹿島出版	2000.03.30
2	登美丘町史	双輪印刷株式会社	1954.04.10
3	町に住まう-大阪都市住宅史	平凡社	1989.08
4	月刊 大建協 493	大阪建設業協会	1990.03
5	郊外住宅地開発の史的考察 -大美野田園都市-	日本建築学会大会学術講演梗概集	1988.1
6	改善住宅展覧会	関西土地株式会社	1934.04.15
7	機上より見たる大美野田園都市	関西土地株式会社	-
8	大美野田園都市住宅図録	関西不動産株式会社	1937
9	数寄屋住宅集	関西不動産株式会社	1937
10	大美野田園都市住宅博覧会記念絵葉書	関西土地株式会社	1932
11	大美野田園都市絵葉書	関西土地株式会社	1932
12	大美野会会員名簿	大美野連合自治会	1937
13	大美野連合自治会会則(平成7年)	大美野連合自治会	1995.4.1
14	大美野会報(昭和15年)	大美野連合自治会	1940
15	大美野会報(平成19年)	大美野連合自治会	2007.7.28
16	大美野幼稚園創立50周年冊子	学校法人大美野学園	1985

つに分類した。関西土地株式会社による『協定・ルール・制度』は、住宅地内の建築について設けられた規制を抽出した「建築規制」、住宅地内の宅地の屋外部分について設けられた規制を抽出した「屋外規制」の2分類とした。

以上の整理を通じて、開発時に計画・実現され、現在まで継承された大美野らしい景観とソフト施策から捉えた大美野らしい景観について整理し、それらを景観資源として明確化した。

(3) 居住者が捉えた大美野らしい景観に関する調査方法

居住者が捉えた大美野らしい景観の把握については、居住歴が30年以上と長く大美野をよく知る居住者(11名)と近年住み始めた居住者(居住歴30年未満, 10名)を対象として写真投影法を用いた調査(平成23年11月実施)を行った。また、依頼時には撮影シートを配布し、写真ごとに撮影対象と撮影理由、撮影位置を記入してもらった。

解析では撮影対象と撮影理由、撮影位置を用いて、居住者が捉えた景観構成要素を把握した。次いで、風景を構成する要素が1対象物に限定される「点景」、風景を構成する要素が複数あり、1敷地内の対象物に限定されている「敷地景」、風景を構成する要素が2つ以上の敷地にまたがっている「街路景」、風景を構成する要素が地域外の要素を捉えた「遠景」の4つの景観タイプに写真を分類し、景観タイプごとに景観構成要素を集計して居住者が評価した大美野らしい景観の景観構造を明らかにした。次に、対象景の視点場の位置を景観タイプ別に大美野の敷地割図に布置し、その視点場の集積地ごとに景を集計して、居住者が捉える大美野らしい景観の分布特性を特定した。解析対象の景は、大美野をよく知る人から得られた景観写真96景、最近住み始めた人から得られた景観写真78景、計174景となった。

3. 解析及び考察結果

(1) 大美野の景観資源の特定

i) 大美野の形態的特徴

全体計画では、昭和12年の状況を見ると、大美野住宅地の施設配置では中央ロータリーの東には商業施設が存在し、商店地区を形成している^{資料7)}。ロータリー西側には幼稚園を含む大美野会館、福德稲荷神社および境内公園が存在していた^{資料1)}。住宅地中央部には上水道の水源施設、北西部には大草村尋常小学校が確認できる^{資料1)}。大美野の景勝について「金剛、葛城の峻峰」「西泉州の田園」「淡路島」を望むことができた^{資料6・7)}と記述されている。現在でも中央ロータリーの東側に商業施設と店舗共有住宅が存在し、ロータリー西側には幼稚園、大美野会館と福德稲荷神社、北西部には堺市立登美丘西小学校がある。また、遠方の金剛山を望むことのできる景勝は5地点となっている(図1)。

次いで、昭和12年の道路構成は「月刊 大建協 493」^{資料4)}では、大美野の街路パターンについて「ロータリーを中心に放射状道路をもうけ、それらを環状道路で結ぶというドイツ式の街路計画」と述べられており、住宅地南東部に中央ロータリーとその中心には噴水が配置されていた^{資料2)}。

それらを中心として放射状・環状の道路^{資料3)}が確認でき、「是等の道路巾員は最大十六米(八間八分)、最狭六米(三間三分)にして」^{資料7)}とあるように幅員を16m, 10m, 6mの段階的な構成とされており、ロータリー北の交差点と西の交差点の2箇所では中心に緑地帯が配置されていた^{資料7)}。また、大美野会前役員へのヒアリングによると、北西に横切る道路の両側にサクラなどの街路樹が植えられてた。現在でも中央ロータリーの中心に噴水が存在し、同時に放射環状の道路と幅員16mの道路が確認できる。一方、北の交差点と西の交差点の2箇所にあった緑地帯が消失し、北西に通過する道路では街路樹の並木が喪失している。

次いで、敷地形態についてみると敷地規模は昭和11年に開かれた健康本位住宅博覧会に関する記述^{資料1)}を見ると「出品された住宅は平均で、敷地一五七坪(約519㎡)・建坪二四坪(約79㎡)」とあり、大美野田園都市住宅区^{資料8)}等の図面から敷地規模と建蔽率を算出すると、第一期開発地区では平均敷地規模は445.61㎡、平均建蔽率は19.3%、第二期開発地区では、平均敷地規模635.96㎡、平均建蔽率16.3%となり、当時、敷地規模が400㎡以上、建蔽率20%未満の住宅が大半であったと考えられる。住宅様式は和風住宅^{資料9)}、洋風住宅^{資料6)}が混在しており、建物階数についても平屋住宅と二階建て住宅が混在していた。一方、屋根形状をみると勾配屋根が共通の特徴として確認できる。敷地際の形態について、登美丘町史^{資料2)}では「住宅の周囲に生垣をめぐらせ」とあり、大美野会前役員へのヒアリングでも「生垣はカイヅカイブキの生垣を中心として、ウバメガシなど数種類の生垣が設置されていた」と確認された。以上のことから、現在でも開発当初の面影を残す住宅として敷地規模が400㎡以上で建蔽率20%未満かつ勾配屋根の敷地とすると全体で13軒を抽出でき、カイヅカイブキの生垣を有し、接道部緑被延長率が50%以上である敷地は、全体で127軒で確認できた(図1)。

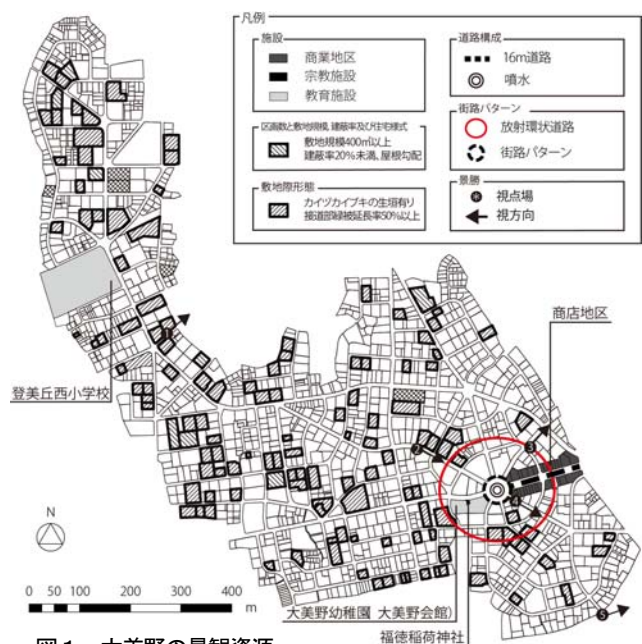


図1 大美野の景観資源

ii) 大美野の社会的特性

関西土地株式会社が設けた協定・ルール・制度をみると、「近代日本の郊外住宅地」^{資料11)}では「大美野田園都市土地利用に関する当社の希望と制限として大美野田園都市に住むためのマニュアルを作った」とあり、建築規制では「一般公衆の迷惑となる建物を建築せざること」、「建物等の建坪はお買い受け宅地の5割以下とすること」、「建築の場合はあらかじめ設計図書を弊社にご提示いただき承認を得られがたきこと」とあり、屋外規制については「道路境界線より2尺以上後退して生垣を設け」ることとされていた。

大美野会の目的についてみると大美野会前役員のヒアリングより、昭和10年頃の目的は「会員同士の親睦と住みよいまちづくりを行うこと」であったといわれており、平成7年の「大美野連合自治会会則」^{資料13)}をみると、結成当初の目的が維持されているものの、街並み形成や誘導に関する取り決めがなく、大美野会の設立当時から現在まで景観の誘導に関しては行っていないことが明らかとなった。

iii) 景観資源の特定

以上のことから景観資源としては、中央ロータリーと噴水を中心に開発当時から残る大美野会館(幼稚園)と福德稲荷神社を背景とした景観、放射状の道路の中心に噴水を配置したビスタ景観、中央ロータリーに繋がる幅員16mの道路沿いに商店が集積する街路景観、中央ロータリー外周の曲線状の街路景観が挙げられる。次いで、住宅更新に伴って減少しつつあるものの、カイツカイブキの生垣が連担し大規模で低建蔽の敷地に勾配屋根の住宅が並ぶ区画道路沿道の景観が続く。これらの地域景観は関西土地株式会社が建蔽率の制限や生垣設置等の規制を設けたことによって形成されてきたものである。さらに、地区内の小学校を視対象とする点景や金剛山地を望む景勝も景観資源の一つであることを明らかにした。一方、社会的特性を見ると、大美野会はコミュニティ形成と共有財産の管理、関西土地株式会社は景観誘導という役割分担がなされていた。関西土地株式会社は建蔽率の制限や生垣の設置の義務等の規制を設け、生垣が連担した景観と低建蔽の敷地が並んだ景観を形成していたが、昭和36年に会社が解散してからは景観誘導に対する施策は大美野では行われていない。

(2) 居住者が捉えた大美野らしい景観の特定

表2より大美野をよく知る人が捉えた大美野らしい景観

表2 大美野らしい景観の構成要素割合

景観タイプ	景の合計	道路										敷地														地域外						
		道路本体			付属物		敷地際					建物				緑地		景の計	駅前高層マンション	山なみ												
		曲線道路	直線道路	ロータリー	景の小計	噴水	クスノキ	景の小計	門	塀	生垣	その他	フラントボックス	庭木	その他	景の小計	戸建住宅				集合住宅	教育施設	宗教施設	商業施設	景の小計	煙	公園					
		大きい	新しい	新しい	古い	新しい	新しい	古い	新しい	新しい	古い	新しい	古い	新しい	古い	新しい	古い	新しい	古い	新しい	古い	新しい	古い	新しい	古い	新しい						
大美野をよく知る人	点景 (%)	29.2	0.0	0.0	0.0	4.2	2.1	6.3	0.0	1.0	2.1	3.1	1.0	0.0	2.1	1.0	10.4	1.0	1.0	0.0	5.2	1.0	2.1	1.0	11.5	0.0	1.0	22.9	0.0	0.0		
	敷地景 (%)	19.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	11.5	2.1	0.0	5.2	0.0	13.5	19.8	11.5	1.0	0.0	1.0	0.0	0.0	1.0	0.0	14.6	0.0	0.0	19.8	0.0	0.0	
	街路景 (%)	50.0	4.2	1.0	14.6	19.8	5.2	0.0	5.2	0.0	27.1	6.3	0.0	5.2	0.0	10.4	37.5	2.1	1.0	1.0	0.0	2.1	1.0	2.1	6.3	14.6	0.0	1.0	46.9	0.0	0.0	
	遠景 (%)	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	1.0	0.0	
合計	(数)	96	4	1	14	19	9	2	11	0	1	40	11	1	10	2	24	66	14	3	1	1	7	2	5	7	39	0	2	87	1	0
	(%)	100	4.2	1.0	14.6	19.8	9.4	2.1	11.5	0.0	1.0	41.7	11.5	1.0	10.4	2.1	25.0	68.8	14.6	3.1	1.0	1.0	7.3	2.1	5.2	7.3	40.6	0.0	2.1	90.6	1.0	0.0
最近住み始めた人	点景 (%)	30.8	0.0	0.0	0.0	0.0	3.8	1.3	5.1	2.6	0.0	3.8	5.1	1.3	0.0	1.3	0.0	14.1	1.3	0.0	0.0	1.3	1.3	2.6	1.3	7.7	1.3	2.6	25.6	0.0	0.0	
	敷地景 (%)	23.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.3	1.3	14.1	2.6	0.0	1.3	0.0	17.9	23.1	6.4	1.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	7.7	0.0	0.0	23.1	0.0	0.0	
	街路景 (%)	44.9	2.6	3.8	9.0	15.4	6.4	0.0	6.4	1.3	0.0	32.1	10.3	0.0	3.8	0.0	7.7	38.5	3.8	1.3	0.0	0.0	1.3	1.3	0.0	6.4	0.0	41.0	0.0	0.0		
	遠景 (%)	1.3	0.0	0.0	0.0	0.0	1.3	0.0	1.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.3	0.0	1.3
合計	(数)	78	2	3	7	12	9	1	10	4	1	39	14	1	4	1	20	59	9	2	0	0	2	2	2	1	17	1	2	70	0	1
	(%)	100	2.6	3.8	9.0	15.4	11.5	1.3	12.8	5.1	1.3	50.0	17.9	1.3	5.1	1.3	25.6	75.6	11.5	2.6	0.0	0.0	2.6	2.6	2.6	1.3	21.8	1.3	2.6	89.7	0.0	1.3

の景観タイプの割合をみると、街路景は50.0%と半数を占め、その景観構成要素の割合をみるとカイツカイブキの生垣を捉えた景が27.1%と優先し、次いで、ロータリーを捉えた景が14.6%となった。次いで、点景を捉えた景は29.2%と多く、景観構成要素としては、幼稚園を捉えた景が5.2%、噴水を捉えた景が4.2%と多い。一方、敷地際を捉えた景は10.4%と多いものの、特定の要素はなく、それぞれ分散している。

図2から大美野らしい景観の集積をみると、中央ロータリー、中央環状道路、北西交差点、北交差点、北環状道路、西交差点、小学校前の通りの7ヶ所で集積がみられた。中央ロータリーではロータリーや噴水を捉えた街路景と同時に、周囲の幼稚園や商業施設等周辺施設の点景も捉えられている。中央環状道路付近では、カイツカイブキの生垣を中心として植栽を捉えた街路景がみられ、北西交差点周辺では、カイツカイブキの生垣とサクラ類の庭木の連担を捉えた街路景と、その他の庭木と大規模な戸建住宅を捉えた敷地景が抽出できた。北交差点付近ではロータリーとその他の庭木や商業施設といった周辺環境を捉えた街路景、北環状道路付近では、クスノキやウバメガシの生垣を捉えた点景や曲線道路と道路沿いの生垣や樹木を捉えた街路景が抽出できた。西交差点ではカイツカイブキの生垣を中心とした植栽の連担した街路景や、大規模で古い戸建住宅の敷地景が見られ、交差点付近には公園と商業施設を捉えた街路景もみられた。小学校前の通りでは、カイツカイブキの生垣やロータリーを捉えた街路景が多く捉えられ、学校を捉えた点景も抽出できた。

次に、表2より最近住み始めた人が捉えた大美野らしい景観の景観タイプの割合をみると、街路景が44.9%と約半数を占め、その内訳をみるとカイツカイブキの生垣を捉えた景が32.1%と最も多く、次いで、ロータリーを捉えた景が9.0%である。次いで、点景が30.8%と多いものの、景観構成要素は分散しており、大美野らしさを感じる特定の要素がないことがわかる。

図3から大美野らしい景観の集積をみると、中央ロータリー、西交差点、小学校前交差点、北端の交差点の4ヶ所が抽出できた。中央ロータリーでは噴水を捉えた点景、噴水とロータリーを捉えた街路景が確認できた。西交差点で

は、大美野をよく知る人と同様にカイツカイブキの生垣を捉えた街路景と大規模で古い戸建住宅を捉えた敷地景、公園や商業施設を捉えた点景がみられた。小学校前交差点ではカイツカイブキの生垣を捉えた街路景、その他の庭木とカイツカイブキの生垣を捉えた敷地景が捉えられている。北端の交差点をみると、カイツカイブキの生垣とその他の庭木を捉えた敷地景、カイツカイブキの生垣と小学校を捉えた街路景が抽出できた。

以上のことより居住歴に係わらず街路景が大美野らしい景観として居住者に最も重視される傾向にあり、特にカイツカイブキの生垣や庭木が連担した街路景観やロータリーを中心とした景観が大美野らしい景観として捉えられていることが分かった。次いで、点景が重視される傾向にあるが、大美野をよく知る人は幼稚園や噴水をシンボリックな景観として多く捉え、最近住み始めた人は特定の景観としては捉えていないことが分かった。大美野らしい景観として評価されたこれらの景観の分布状態をみると、両居住者に共通して中央ロータリーやその西の交差点、小学校前に分布が集積している。中央ロータリーの景観をみると、大美

野をよく知る人はロータリーに面して存在する幼稚園や福徳稲荷神社等の施設を含めた一体的な景観として捉えているが、最近住み始めた人は幼稚園等の周辺施設を捉えておらず、ロータリーとその中央に位置する噴水だけを捉えている。一方、西交差点付近と小学校前では両居住者ともにカイツカイブキの生垣が連担した調和的な景観が捉えられ、西交差点付近では生垣と庭木を持った趣のある大規模戸建住宅が点在する景観、小学校前では点景となる小学校も捉えられている。さらに、大美野をよく知る人は小学校前の通りを南北 500m にわたって連続した景観として捉えているのに対し、最近住み始めた人は 2ヶ所に分割して捉えているといった差異も認められた。次いで、大美野をよく知る人だけが捉えた景観の集積をみると、中央ロータリー外周の環状道路と中央ロータリー北西の交差点、北交差点を囲む環状道路では、場所ごとにカイツカイブキの生垣がある曲線道路やカイツカイブキの生垣と一体となった庭木のサクラ、庭木や商業施設を含めたロータリーの景観が捉えられていることが明らかとなった。

4. まとめ

開発当時から現在にかけて継承されてきた景観資源と居住者が捉えた大美野らしい景観で一致しているものとしては、カイツカイブキの生垣が連続した景観や中央ロータリーと噴水を中心に大美野会館と福徳稲荷神社を背景とした景観があげられ、今後、大美野を代表する景観として保全していくことが求められる。同様に小学校の景や曲線道路の景、趣のある大規模戸建住宅の景、庭木のサクラの景も一致した景観であり積極的に保全していくことが望まれる。

一方、西交差点や北交差点の街路景は景観資源として捉えられなかったものの居住者が大美野らしい景観として評価しており、新たな大美野らしい景観として今後、醸成していくことが望まれる。前述したような個々の景に加えて、大美野をよく知る居住者は中央ロータリーや小学校前の通りの景観を一体的、連続的に捉えており、連続した街路景を極力、一体的に保全していくことが重要である。

関西土地株式会社の解散後、建築や屋外規制が受け継がれなかったことから、今後景観の規制・誘導を図るためには、大美野会のコミュニティ形成に関する役割を活用し、景観保全のためのルールを設けることに対する共通理解の醸成と、施策の段階的合意を形成することが求められる。

引用・参考文献

- 1) 萩浦理子・山本聡・下村泰彦・増田昇 (1999) : 居住者の日常風景に対する嗜好性と地区の歴史的蓄積とのかかわりに関して : ランドスケープ研究 62(5), 677-680
- 2) 橋詰直道・磯谷有紀 (2007) 大宮盆裁町における緑地景観の特徴 : ランドスケープ研究 70(5), 669-672
- 3) 山田真紀子・加我宏之・下村泰彦・増田昇 (2005) : 戦後に開発された阪神間の戸建て住宅地における緑地の変化実態に関する研究 : 環境情報科学論文集 19, 1-6
- 4) 田川圭佑・加我宏之・下村泰彦・増田昇 (2010) : 昭和初期に開発された堺市大美野住宅地における住宅更新と接道部の緑の変化実態に関する研究 : 日本都市計画学会学術研究論文集, 775-780



図2 大美野をよく知る人が捉えた大美野らしい景観の分布特性



図3 最近住み始めた人が捉えた大美野らしい景観の分布特性